

D. 継続的計画的な進路指導についての研究

— 第 2 報 告 —

鈴木洋一郎 新村 泰子 原田 秀雄 中野 満男
加藤 剛 倉田 有邦 高橋みな子 霜田美津子
富田 昇 阿部 健一

ま え が き

前年度において、われわれDグループは研究テーマの設定とその計画を考え、指導実施の一部を発表した。本年はその第2年度にあたり、継続的にかつ計画的にそのテーマを具体的に考究してその結果をまとめようとした。進路指導は対象となる生徒の成長、変化に応じて具体的に柔軟性をもち、絶えず斬新的でなければならない。この点、最初の計画と若干違う方向に進んだものもあるし、また、予想される到達点までは実現されないものもあった。しかし、グループ全員が絶えずその研究成果の情報を交換し、討論しながら次のように報告する。これはそれぞれ分担のテーマに従ってのものであり、まだ十分なものとは言いがたいが、その一端を述べて大方の御教示を得ようと思う。

本 論 — 研究の経過

I. 特活と進路指導

1. はじめに

生徒の学校生活の中における特活、特にクラブ活動の占める時間的、内容的役割は大きい。このことは、Bグループの研究のところでも述べたように、H.RのL.Tの討議題としてクラブ活動と勉強の両立が問題にされていることでもわかる。そこでクラブ活動が学習との関連において、どのようなつながりを持ち、どのように影響しているかを究明してみたいと考えた。しかしよく考えてみると、クラブ活動が時間的に、また疲労として身体的に影響している点は大きい。したがってクラブと勉強の両立という問題になると、きまったように、運動クラブのようにはげしい身体活動をするには学習の面にマイナスにこそなれ、決してプラスにならないという結論が出やすい。また保護者の考え方にはそうした考え方が非常に根強よく、時には成績の低下や成績不振の原因をクラブ活動の責任のように思いこみ、クラブ活動をやめさせれば学習能力が上がるかのように言われることさえある。また

生徒の中にもクラブ活動、特に運動クラブ活動は学習のさまたげになるという考えのもとに活動日の少ない文化クラブをえらんで途中からかわってゆく者もいる。ここではクラブ活動のそうした面について特に高校生を中心として考えてみようとした。そこで、まず本校のクラブ活動の実態を簡単に説明する。クラブの数、クラブ員数等については次の表のようである。クラブ成立の条件としては人員、顧問、活動内容、等から考慮することになっている。また1人1クラブが原則となっているが、生徒会の委員会の中の新聞報道局員、放送局員、図書委員になったものは希望によってクラブに入らなくてもよいことになっている。また活動日は原則として運動クラブが週3日、文化クラブが週2日以上活動をすることになっている。各クラブ顧問は学期末にはクラブ員の出席率や活動状況を考慮してA.B.C三段階の評価をつける。したがってクラブの出席率は高3を除く大部分の者が80%以上の出席率で、いわゆる幽霊部員はいない。(ただし高3の出席は自由で強制されない)出席率の非常に悪い者(50